

「菅原道真の文学と元稹・白楽天の文学」大宰府における「敍意一百韻」詩をめぐる」

(一一三頁～一六〇頁)

金原理著『平安朝漢詩文の研究』(九州大学出版会)「第二章 貞観延喜の時代 菅原道真の漢詩」

(二六八頁～二七七頁)

谷口孝介著『菅原道真の詩と学問』(塙書房)「第三章 道真文学の行くえ 二・一百韻形式の享受と意

図」

(二四九頁～二六〇頁)

(6) 川合康三著『白楽天」官と隠のはざままで』(岩波新書)「第3章 諷諭と閑適 3・元稹との交情」

「第4章 生きるよろこび―自足する晩年」

(一四九頁～一七八頁)

〔参考〕

以下 「敍意一百韻」全句の通釈を付す。

通釈

【二段】

- 1 人の一生というものには、定まった状態とてなく
- 2 その人間の運命は、天を支配する神に全てを委ねられている。
- 3 (かつて今まで) 私自身が、鎮西の太宰権帥といった職を手にしようと考えたことがあっただろうか。
- 4 右大臣の職から(突如として) 左遷の身に替わろうとは一体どうしたことか。